

令和5年2月号



前回まで、東上総における広常の居城跡の伝承がある有力な場所を紹介してきましたが、実はほかにも候補とされる場所があります。今回はそれらを紹介していきます。

・市原市能満地区

国府の周辺に広常の居城があったのでは、という考察から、『千葉県歴史(県史)』で指摘されています。しかし、伝承・遺構ともに残っていません。

・城坂城(新山城、東金市)

広常が築いた城と伝わりますが、遺構はあまり残っていません。上総介古城址(いすみ市大原)

瀧泉寺近くの田の中。『日本博覧図』所収の瀧泉寺の絵図内に記載され、江戸時代の地誌『房総志料』には旧雑色村に広常屋敷伝承地があると記載があり、それがこの場所とみられます。

今回まで4回にわたり、広常の居城跡伝承を追ってきました。有力な候補があるものの、いずれもまだ決

定打に欠ける、というのが現状です。

通説では、広常の居城は玉前荘(現在の二宮町、長生村、白子町および茂原市、睦沢町、長南町、いすみ市の一部)にあったとされています。これは、①玉前荘が上西門院(統子内親王)領であったこと(朝廷とのつながり)、②上総国一之宮である玉前神社の神威的背景、③「千葉大系図」という史料には広常の祖父にあたる「常家」(※系図により名前が異なる)が「上総国長柄郡一宮柳澤城」を居城としたと記されていること、がその理由です。これだけ多くの場所に広常伝承が残っている、ということから、この東上総地域にとつて広常がどんな存在だったのかをうかがい知ることができません。「史実」とは異なるのかもしれませんが、大切に、後世に語り継ぎたいものです。

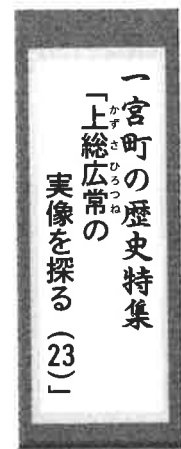


▲海からみた一宮町 (2018年撮影)

(学芸員 江澤一樹)

【問合せ】教育課 ☎(42) 1416

令和5年3月号



本コラムもいよいよ最終回です。最後は「広常とは何だったのか」というテーマで書かせていただきます。

野口実氏(京都女子大学名誉教授)は1992年に発表した論文の中で、広常について「いささか大風呂敷で無骨な、大言壮語を吐くが、根は気の小さい、やさしい性格」がうかがえるような印象をもつ、と評価しています。

これまで紹介してきたとおり、東上総地域には多くの広常伝承が残っています。広常とは別人の「上総介」と混同しているものもありますが、広常が親しまれてきた証拠であり、「上総介」といえば広常だ、という地域の認識があったためのものです。

今回、NHK大河ドラマで登場したことにより、間違いなく広常は世間の注目を浴びました。そしてドラマでの描かれ方と史実との相違は置いておいて(あくまでも「ドラマ」です)、広常という人物を知る、考える機会になり、東上総地域の人々にとっては「郷土の偉人」として再認識する契機となりました。

(学芸員 江澤一樹)

【問合せ】教育課 ☎(42) 1416

私個人としては、広常に対して「東

国随一の勢力を持つているという自負心のある、プライドが高い人物。武芸にも優れているが猪武者というわけではなく、それなりの教養も備えていた優秀な人物だった」のではなく、という印象を持っています。後に隆盛を誇った千葉氏の陰に隠れてしまいました。広常の存在は日本史という広い意味でも重要な役割を果たしていたといえるでしょう。

高藤山城跡山頂の石碑には碑を建てた加納久徴を評して、次のような一文が記されています(以下、筆者要約)。

「領内の史跡や文化財を保護して失われぬようにすることは、民を統治する(牧民)者の責務である」

先人たちが残し、伝えようとした思い。私たちはこれからも、次の世代へ残していけるよう、努めていかなくってはなりません。

なお、本コラムを再構成・編集した総集編が昨年11月に町教育委員会から発行された『上総広常とその時代』(1冊500円、郵送対応あり)に掲載されています。ご希望の方はぜひお買い求めください。